

円盤から球体へ

—映画 *The Day the Earth Stood Still* の 1951年版と2008年版の比較—

青 砥 吉 隆

I. はじめに

本稿では、1951年に製作されたSF映画『地球の静止する日』(*The Day the Earth Stood Still*) と、同作品のリメイクたる2008年の『地球が静止する日』(*The Day the Earth Stood Still*) の比較と分析を行う。前者の1951年版は、『市民ケーン』(*Citizen Kane*) の編集や『ウェスト・サイド物語』(*West Side Story*)、『サウンド・オブ・ミュージック』(*The Sound of Music*) の監督を手掛けた巨匠ロバート・ワイズ (Robert Wise) によるもので、数多の研究が指摘する通り、上映から実に半世紀以上を経た現在でもファースト・コンタクトもののSF作品として高い評価を受けている。例えばキース・ブッカー (Keith Booker) は、この作品は「テーマの深刻さという点においてSF映画の新境地を切り開き、冷戦時の兵器開発競争を批判した」(xxii) とし、フィル・ハーディ (Phil Hardy) は、「この映画を成功に導いたのは、ワイズによる、不吉な寓話とその中で展開される脇筋との絶妙な整合性である」(127) と分析している。一方、後者の2008年版は、スコット・デリクソン (Scott Derrickson) という新進気鋭の映画監督による作品であり、未だこのリメイクに十分に焦点を当てた研究は見当たらない。例えば、上掲のブッカーによる専門書の出版は2011年だったが、その中に2008年のリメイク版に関する言及はたった一行のみ、「特撮技術は向上したが、印象深さも面白さもオリジナル版に劣る」(327) とされた。本研究は、両者を学術的に分析し

比較することによって、冷戦が終結して久しい2008年において、デリクソンが一体どのような意図を以ってワイズによる傑作をリメイクしたのかという問いに答えようとするものである。

1951年版と2008年版を比較すると、様々な変化を発見することが出来る。例えば、劇中で重要な役割を果たす未亡人、ヘレン・ベンソン（Helen Benson）の職業は、アメリカ合衆国商務省の秘書から、プリンストン大学で教鞭を執る宇宙生物学者へと変化を遂げた。また、その長男であるボビー（Bobby）は、ジェイコブ（Jacob）と名を変えられた上、人種も白人から黒人へと設定が変更されている。これらは、1951年から2008年にかけてのアメリカ社会と文化が経験した様々な変化から誕生したものとして捉えることが出来るだろう。また、これらを以って、ジェンダー論や人種論を展開することも出来るだろう¹。

しかし本稿では、そのような切り口は採らない。焦点を当てるのは、宇宙からの来訪者であるクラトゥ（Klaatu）と、それぞれの時代において人類が有していた科学・技術を遥かに凌駕する、彼の操る科学・技術の変化である。特にその違いは、1951年版において彼が地球へ来訪した際に使用した銀色の空飛ぶ円盤と、2008年版において使用したアースブルーの球体という表象の変化に色濃く表れている。ここで問題となるのは、円盤から球体という単なる外観の変化だけではない。特筆すべきは、1951年版においては宇宙船たる円盤の内部構造が詳らかにされたのに対し、2008年版においては、球体の内部は完全にブラックボックスと化しており、観客を含めた人類にはその詳細が明らかにされることはなかった、という点である。

また、それに応じるかのように、クラトゥとその同伴者たるロボット、ゴート（Gort）が地球を訪れた目的も大きな変化を遂げた。1951年版においてクラトゥは、東西陣営に分かれ核兵器の開発を続ける人類に対し警告を与えるためにやって来た。彼は劇中で次のように述べる。「あなた方が自分の惑星をいかに扱おうとも興味はない。しかし、他の星へ危害が及ぶのであれば、地球は灰燼に帰すだろう。あなた方の選択肢は単純だ。我々に加わり、平和に生きるか。それとも現在のやり方を続け、絶滅するか。

我々はあなた方の答えを待っている。決定権は、あなた方にある」(1:29:48-1:30:21)。一方2008年版においては、ヘレンが「貴方は私たちから地球を救いに来たのね」(1:01:46-1:01:57)と看破したように、クラトゥは初めから、地球を蝕む「破壊的な」(0:51:40-0:51:43)人類を排除し、この惑星それ自体を守るために地球にやって来たのである。なぜこのような変化が生じたのだろうか。

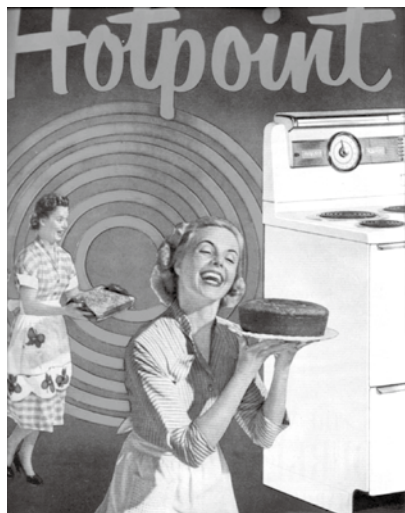
予め結論を述べると、それぞれの時代における科学・技術に対する態度の違いがこれらの変化を生んだ。特に2008年版については、建築家であり思想家でもあったバックミンスター・フラー (Buckminster Fuller) による宇宙船地球号 (Spaceship Earth) の概念の影響が顕著に現れている。さらに、フラーをはじめとした思想家たちが多大な影響を及ぼした、ニューサイエンス (New Science) とニューエイジ運動 (New Age Movement) の影響も大である。以降、円盤と球体、クラトゥとゴートの地球来訪の目的およびその性格付けを中心に、両作品が生まれたそれぞれの時代背景と、その時代に特有な問題について分析していく。

II. オリジナル版

1950年代アメリカの時代精神とはいかなるものだったのか。非常に興味深いことに、一般大衆向けの雑誌に掲載されていた広告からは、当時の人々が物質的に豊かな生活に対し強い憧れや希望を抱いていたことが読み取れる。そして、この生活を支える基盤こそがアメリカの科学・技術、産業力に他ならなかった。ここでは、1952年4月7日付の『ライフ』誌 (*Life*) を例に挙げよう。表紙を飾るのは、女優マリリン・モンローである。この号では、「宇宙からの来訪者はいるのか」(*Have We Visitors from Space?*) と題された、見開き3ページ分の特集が組まれている。そこでは、当時目撃されていた飛行物体について、箇条書きで「それらの物体は、現在の科学では自然現象として説明がつけられず、むしろ高度な知性によって製造され、操縦されている人工の機械だと考えられる。地球で知られている、あるいは

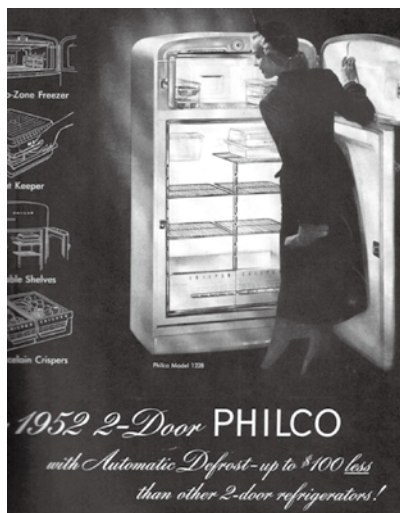
は計画されている動力装置では、それらの機械の機動性能を説明することはできない」(Darrach and Ginna 81) と結論付けられていた。『ライフ』という非常にポピュラーな大衆向け雑誌に「宇宙からの来訪者はいるのか」という特集が組まれたという点を考慮しても、この号は、古典SF映画の傑作『地球の静止する日』を分析する上で、またとない史料となるだろう。

この号の紙面では、缶詰やハム、アイスクリーム等の食料品や化粧品、衣料品の広告に混ざって、テレビ、ラジオ、レコード、電子壁掛け時計、乗用車、35ミリカラーフィルム、掃除機、洗濯機、電子制御のオーブン、冷蔵庫、スチームアイロン、絆創膏、医薬品といった数々の工業製品の広告を見つけることが出来る。色鮮やかなそれらの広告に描かれる人々の顔は、どれも明るい笑みに満ちており、また同時に、見る者に対してどこか誇らしげな印象すら与える。



図版1.

Hotpoint, advertisement (*Life*, April 7, 1952, 98.)



図版2.

Philco, advertisement (*Life*, April 7, 1952, 1.)



図版3. Lederle, advertisement (*Life*, April 7, 1952, 48-49.)

例えば、図版3のように、「死と戦う戦士たち」(*Warriors against Death*) と題されたレダリー社 (Lederle) の医薬品の広告には、「現代医療によって駆逐された殺人病原菌」(the great killer-germs conquered by modern medicine) というキャプションが付けられており、肺炎、チフス、髄膜炎、ロッキー山発疹熱、亜急性細菌性心内膜炎を引き起こす病原菌類と、それらと闘う科学者たちのイラストが、笑顔の少女と共に描かれている。

象徴的であるのは、同じ号の『ライフ』に掲載された「レイセオン社の未来のテレビを比較しよう」(*Compare Futurized Raytheon TV*) と題された広告だ。図版4に示すその広告には、1952年当時において最新型だったレイセオン社の17インチテレビ、The Commander, M-1726の前に、兄妹と思われる二人の子供が座している様子が描かれている。彼らは笑顔であり、妹がチャンネル選択のノブを回している。注目すべきは、そのテレビの画面に「1962」という文字が映し出されていることである²。



図版4. Raytheon, advertisement (*Life*, April 7, 1952, 8.)

子供たちは、1952年のテレビのブラウン管の中に10年後の未来を見て、無邪気に笑っていた。この無邪気さは、子供たちの未来に明るい希望を託せられるほどに、当時のアメリカが自信に満ちていたことを象徴的に表しているといえるだろう。その自信は、比肩する国が他にないほどに当時のアメリカが科学・技術の先端を走っていたことと、それが作り上げた豊かな生活をアメリカが享受していたことに起因している。

アメリカにおける1950年代は、数々の工業製品が安価に大量に製造されるようになり、国民一般にも広く普及し始めた時代だった。島田真杉によれば、テレビ、ラジオ、冷蔵庫、洗濯機、車など、様々なモノに囲まれた生活こそが、豊かさの象徴とされた。また、第二次世界大戦終結の1945年から1960年代にかけて、国民総生産は2.5倍に増加し、失業率は5%以下にとどまっていた。それに加えて、可処分所得の総額は、1950年の2,070億ドルが、1960年には3,500億ドルに増加した。所得が全体的に上昇して中産階級が膨らみ、下層階級の人々が急速に中産階級的な生活スタイルや意識を身に付けるようになった。つまり個人消費の大幅な増加によって、アメリ

カには世界のどこよりも早く大量消費社会が到来したのである (232-234)。そして、この生活を支える基盤こそが科学・技術に他ならなかった。

しかし、科学・技術はそのような物質的な華やかさや豊かさを生むだけにはとどまらなかった。科学・技術の発展は、冷戦と核開発競争を押し進めるものであった。また同時に、兵器を開発していく過程においても科学・技術は進歩していった。ダニエル・ウォシク (Daniel Wojcik) によれば、1950年代当時の映画には、核戦争に対する不安感や無力感を表現しているものが多く見られた。例えば、1953年の『原子怪獣現わる』(*The Beast from 20,000 Fathoms*) をはじめとして、1954年には『ゴジラ』(*Godzilla*)、1955年に *World without End*、1956年に *X The Unknown* と *The Day the World Ended* が、また1958年に *Teenage Cave Man*、そして1959年には『渚にて』(*On the Beach*) 等が製作された。(109-111)。これらの映画作品の中で最も有名なものは、スタンリー・キューブリック監督による、『博士の異常な愛情：または私は如何にして心配するのを止めて水爆を・愛する・ようになったか』(*Dr Strangelove or— How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb*) であろう。チャールズ・ギャノン (Charles Gannon) によれば、この作品の公開は1964年だが、1950年代の冷戦恐怖症を風刺したものであった。同時に、核による世界終焉の可能性が実際に高いということに対する、冷戦のニヒリズムを描いたものでもあった (111)。

このように、科学・技術が作り出す豊かさとそれに対する憧れと希望の一方には、同じく科学・技術の生み出した核兵器に対する不安感が歴然と存在していた。本稿では仮にこれを、科学・技術の二律背反的な性質と呼ぼう。そのような時代にあって、クラトゥは易々と4億キロメートルもの彼方にある惑星から、銀色の円盤に乗ってやって来た。彼の住む惑星に戦争は存在せず、平均寿命は130歳だとされた。クラトゥの物腰はあくまで柔らかで、性格も「我々よりも賢く平和的」(Crowther 37) だった。彼が用いた銀色の円盤は、冶金学者でさえ歯が立たないものだった。バーナーもドリルもダイヤモンドすらも通用せず、その円盤からはタラップが降りてきたにも関わらず、表面には継ぎ目一つ確認出来なかった。映画終盤で

明らかにされた円盤の内部は明るく清潔で、自動ドア、様々な計器やレーダー、宇宙航行図、その他、非常に高度な科学・技術を持つ者でなければ製造出来ない機器が並んでいた。これらの装置はスイッチ式ではなく、その上に手をかざすだけで作動するようだった。さらに、円盤内部には、既に心肺停止状態に陥っていたクラトゥを蘇生させることが出来る医療機器までもが設置されていた。クラトゥは、前掲の『ライフ』に見られたような1950年代当時のアメリカ人の憧れたる物質的に豊かな夢のような生活を実現化し、同時に、『博士の異常な愛情』に見られたような唐突なる核兵器による世界終焉の可能性をも克服していた。しかし、そのような世界を作り上げるための具体的な方法は作中では明らかにされず、オリジナル版はオープン・エンディングとなっている。

III. リメイク版

両作品の間における一番の変化は、クラトゥが地球を訪れた理由であろう。オリジナル版では、クラトゥは、人類が初歩の核技術を手に入れ、宇宙空間にも進出しようとしていることを懸念していた。一方リメイク版では、クラトゥは初めから、地球を蝕む人類を排除し、この星それ自体を守るために地球にやって来た。この変化の背景には、1950年代から1980年代の間に起こった、一般の人々らが抱く科学・技術への態度の現れの違いがあると考えられる。

1950年代においては、核兵器と冷戦こそがアメリカにとって最大の問題だった。アメリカとソヴィエトの緊張関係は、1947年のトルーマン・ドクトリンの発表以降、より明確なものになり、それに続いて中華人民共和国の成立、東欧における共産化や朝鮮戦争等、ソヴィエトとアメリカとの対立は、東西陣営の形成という形で世界を巻き込みつつあった。そして、それに拍車をかけたのが、水素爆弾および弾道ミサイルの開発だった。これらの登場によって、戦争はその意味を大きく変えた。第三次世界大戦が勃発することと世界の終焉は、ほぼ同義となった。しかし、それでもなお、

1950年代においては、科学・技術は、我々の生活を豊かにしてくれる、大変有意義なものだった。事実、1951年は、アメリカによって、世界初の核技術による発電実験が行われた年でもある。

しかし、そのような科学・技術に対するナイーブな楽観は、徐々に変化を見せ始めた。特に、1970年代以降には、環境問題が広く意識されるようになった。そのきっかけとなったのが、1962年に出版されたレイチェル・カーソンによる『沈黙の春』(*Silent Spring*)である。この著作において、彼女は、DDTを筆頭とした化学薬品を「死の靈薬」(*Elixirs of Death*)⁽¹⁷⁾に例え、それらが環境に及ぼす様々な悪影響を示した。自然は人間の生活の役に立つために存在する、という当時支配的だった考えを、彼女は人類の思い上がりだと厳しく諷めている⁽¹⁵⁴⁾。また、カーソンが告発した化学薬品以外にも、酸性雨やオゾンホール、森林破壊や各種の汚染等は、深刻なレベルに達しつつあった。これらの原因として、科学・技術が取り上げられるようになったのである。そして、科学・技術の新しいあり方というものも模索されるようになった。

その結果、一部の人々から支持されるようになったのが、ニューサイエンスと呼ばれるものである。ウーター・ハネグラーフ (*Wouter Hanegraaff*)によれば、ニューサイエンスの体系に影響を与えた科学者や思想家たちには、理論物理学者のデビッド・ボーム (*David Bohm*) や、1977年のノーベル化学賞を受賞したイリヤ・プリゴジン (*Ilya Prigogine*)、科学者のジェイムズ・ラヴロック (*James Lovelock*)、物理学者フリチョフ・カブラ (*Fritjof Capra*)、哲学者のアーサー・ケストラー (*Arthur Köstler*) や、セオドア・ローザク (*Theodore Roszak*) 等が挙げられる⁽⁶²⁻⁶⁴⁾。

また、ニューサイエンスの興隆と時を同じくして発展してきたのが、ニューエイジ運動である。エリオット・ミラー (*Elliot Miller*)によれば、この運動に影響を与えた思想家たちは多岐に渡る。未来学者アルヴィン・トフラー (*Alvin Toffler*)、経済学者エルンスト・F・シューマッハ (*Ernst F. Schumacher*)、社会歴史学者ウィリアム・I・トンプソン (*William I. Thompson*)、生物学者ジョナス・ソーク (*Jonas Salk*)、心理学者ジーン・ヒュー

ストン (Jean Houston)、思想家ケン・ウィルバー (Ken Wilber)、人類学者マーガレット・ミード (Margaret Mead)、そして、建築家であり思想家でもあったバックミンスター・フラーが挙げられる。(33)

ニューサイエンスやニューエイジ運動に賛同する者たちは、西欧近代科学と科学・技術の発展によって多くのものが失われたと考えていた。ニューサイエンスの急先鋒、カプラが主に批判するのは、デカルト的な世界観、還元主義的なアプローチである。カプラによれば、還元主義的アプローチは生物学においては大成功を収め、遺伝子の化学的性質や遺伝の基礎単位を解明し、遺伝暗号の解読においてその頂点に達したにも関わらず、依然としてそれには厳しい限界があるという。カプラはここで、生物学者ポール・ワイス (Paul Weiss) の言葉を引き、還元主義的アプローチのみでは、最も基本的な生命システムの振る舞いでさえ、完全に説明出来ないと批判した (102)。

きわめて大まかにみれば、ニューサイエンスとは、還元主義に代表される西欧近代科学の手法が行き詰まりを迎えてしまったと考えた者たちが、オカルト、あるいは思想、哲学、オルタナティブとしての東洋思想など、形而上学的要素を現代科学に付け加えた、いわば新しい科学を作り上げようとした現象だったといえる。そしてニューエイジ運動とは、ニューサイエンスを含包した1980年代を代表する社会的、文化的現象だった。さらに踏み込んでいえば、これは科学・技術の二律背反的な性質を乗り越えようとする運動でもあった。

さて、上述したように、フラーは建築家や思想家としてのみならず、ニューエイジ運動に多大な影響を与えた人物としても知られている。彼は1969年、著書『宇宙船地球号の操縦マニュアル』(*Operating Manual for Spaceship Earth*) において、人類の進化と地球資源の有限性、さらには彼の生きる時代の現状を、「大海賊」(Great Pirates) (34)「エキスパート」(expert) (41) 等の独自の言葉を用いて概観し、その上で次のように警句を發した。

もし宇宙船地球号に搭乗している現代の人類たちがこの容赦ないプロ

セスを理解することが出来ず、また、形而下の物事を形而上学的に習得する機能を果たすよう自律することも出来ないのであれば、人類に未来はないだろう。そして、この宇宙において人類が本来的に有している使命は、他の惑星に住む形而上学的に力を与えられた他の存在による手腕に任されることになるだろう。(46)

この記述は、オリジナル版とリメイク版の違いを考察する上で、この上ない示唆を与えてくれる。上の「他の惑星に住む形而上学的に力を与えられた他の存在」とは、リメイク版のクラトゥの姿そのものである。2008年版の展開は、まさにフラワーが警告を発した通りのものであり、その内容の一致には息を呑む思いである³。フラワーの宇宙船地球号の概念が、2008年版のアースブルーの〈球体〉という表象、そしてストーリー展開に影響を与えたことは、ほぼ確定的であるように思われる。

なお、2008年版においては、球体は一つではなく、多数、小型のものが世界各地に降り立つ。そして、セントラルパークに着陸しクラトゥが降りてきた直径100メートルほどの球体以外からは、何者も降りてくることはなかった。実は、2008年版における球体は、クラトゥの乗り物としての役割のみならず、人類以外の地球上の全ての生物を他の場所へ移動させるための「方舟」(Genesis 6: 1-9: 29)として機能しているのである。ここに至って、なぜリメイク版においてクラトゥの乗り物であるアースブルーの球体の内部が観客を含めた人類に対しては詳らかにされなかったのか、という理由が明らかになる。即ち、デリクソンは現代の人類が「方舟」に乗る資格はないと考えたのである。それは、2008年の人類にとっては、理想的な科学・技術のあり方が未だ不明瞭だった、ということをも意味している。そのような状況下にあって描けるのは、ほんやりとした外見のみ、「宇宙船地球号」のミニチュア版である。科学・技術の理想のあり方が不明瞭であれば、どれだけの特撮技術を以ってしてもその内部を描くことは出来ない。これこそが、1951年版との決定的な違いである。

ニューエイジ運動やニューサイエンスは1980年代に流行の最盛期を迎え

たが、その後は衰退の一途を辿っている。つまり、我々は今も科学・技術の理想的なあり方を模索中である、といった考え方も出来る。人類は未だ科学・技術の二律背反的な性質を乗り越えたとは言い切れない、というのがリメイク版のメッセージであろう。もしそれが達成され、そして誰かが再び本作のリメイクを行えば、その際にはクラトウの乗り物の内部が新しい形で明らかにされるだろう。さらには、それに合わせて、クラトウとゴートの性格付けや、地球への来訪の目的も変化を遂げるであろう。

註

1. しかし、一点のみ、人種について言及しておきたい。それは、主人公クラトウを演じた役者についてである。デヴィッド・ラーガン (David Ragan) によれば、1951年版のクラトウを演じたのはイギリス出身のマイケル・レニー (Michael Rennie) であり、その容姿はいわゆるWASPである (1410)。一方、2008年版を演じたのはキアヌ・リーヴス (Keanu Reeves) であるが、彼の父親は「中国系ハワイ人」である (Germain 1; Neumaier 12)。劇中にはクラトウより先に地球に降り立ち、地球人を観察していたクラトウの同郷人が登場するが、クラトウ＝リーヴスは、その人物と中国語で会話をする。さらに重要なことに、その同郷人は地球人に愛を感じており、クラトウの地球破壊の意図に異議を唱える。この作品における非常に重要なシーンにおいても、「オルタナティブとしての東洋」が顕著に表れていることを指摘しておきたい。
2. なおレイセオン社は、現在ではアメリカ大手の軍需製品メーカーである。ミサイル技術においては先導的な役割を果たしており、アメリカ軍向けにパトリオットミサイルを開発した。また、1947年には、世界初の電子レンジを発明したことで知られている。しかしこの電子レンジは冷蔵庫ほどの大きさがあり、また2,000から3,000ドルと高価なものだった。アメリカに現在のような形での家庭用電子レンジが普及し始めたのは、1960年代後半以降のことである。
Raytheon. “The Invention Engine.”
www.raytheon.com/news/feature/invention-engine.
Accessed on December 10, 2018.
Raytheon. Missile Defense.
www.raytheon.com/capabilities/missiledefense. Accessed on December 15, 2018.

3. フラーが地球外生命体の存在を信じ、それらが地球人たちの進化や発展を見守っているという信念を持っていたか否かは不明である。

引用文献リスト

- 島田真杉「第二次世界大戦後のアメリカ」『アメリカ合衆国の歴史』野村達朗編著、ミネルヴァ書房、1998年、pp.225-246.
- The Bible*. Authorized King James Version, Oxford University Press, 1988.
- Booker, M. Keith. *Historical Dictionary of American Cinema*. The Scarecrow Press, Inc., 2011.
- Capra, Fritjof. *The Turning Point: Science, Society, and the Rising Culture*. Bantam Books, 1988.
- Carson, Rachel. *Silent Spring*. Penguin Classics, 2000.
- Crowther, Bosley. “Emissary from Planet Visits Mayfair Theatre in ‘*Day the Earth Stood Still*.’” *New York Times*, 19 September 1951, p.37
- Darrach, H. B., and Robert Ginna. “Have We Visitors from Space?.” *Life*, April 7, 1952, p.81.
- Derrickson, Scott, director. *The Day the Earth Stood Still*. Twentieth Century Fox, 2008.
- Fuller, R. Buckminster. *Operating Manual for Spaceship Earth*. Series edited by James Snyder, Lars Müller Publishers, 2008.
- Gannon, Charles E.. “Silo Psychosis: Diagnosing America’s Nuclear Anxieties through Narrative Imagery.” *Imaging Apocalypse: Studies in Cultural Crisis*, edited by David Seed, St. Martin’s Press, Inc., 2000, pp.103-117.
- Germain, David. “Out of the Matrix.” *Houston Chronicle*, 5 November 2003, p.1.
- Hanegraaff, Wouter J.. *New Age Religion and Western Culture: Esotericism in the Mirror of Secular Thought*. Brill, 1996.
- Hardy, Phil, ed. *The Aurum Film Encyclopedia: Science Fiction*. 3rd ed., Aurum Press, 1995.
- Hotpoint Advertisement. *Life*, April 7, 1952, p.98.
- Lederle Advertisement. *Life*, April 7, 1952, pp.48-49.
- Miller, Elliot. *A Crash Course on the New Age Movement*. Baker Book House, 1989.
- Neumaier, Joe. “A New Keanu.” *New York Daily News*, 11 June 2006, p.12.
- Philco Advertisement. *Life*, April 7, 1952, p.1.
- Ragan, David. *Who’s Who in Hollywood: The Largest Cast of International Film Personalities Ever Assembled*. vol.2, Facts on File, 1992.
- Raytheon Manufacturing Company Advertisement. *Life*, April 7, 1952, p.8.
- “The Invention Engine.” www.raytheon.com/news/feature/invention-engine. Accessed

on December 10, 2018.

—— “Missile Defense.” www.raytheon.com/capabilities/missiledefense.
Accessed on December 15, 2018.

Wise, Robert, director. *The Day the Earth Stood Still*. Twentieth Century Fox, 1951.

Wojcik, Daniel. *The End of the World as We Know It*. New York University Press, 1997.

フィルモグラフィ

『地球の静止する日』 ロバート・ワイズ監督、1951年（20世紀フォックスホームエンターテイメントジャパン、2008年）

『地球が静止する日』 スコット・デリクソン監督、2008年（20世紀フォックスホームエンターテイメントジャパン、2010年）